マタイ 8:5-13「服する・与る・手放す」

「さて、イエスがカファルナウムに入られると、一人の百人隊長が近づいて来て懇願し、『主よ、わたしの僕が中風で家に寝込んで、ひどく苦しんでいます』と言った。そこでイエスは、『わたしが行って、いやしてあげよう』と言われた。すると、百人隊長は答えた。『主よ、わたしはあなたを自分の屋根の下にお迎えできるような者ではありません。ただ、ひと言、おっしゃってください。そうすれば、わたしの僕はいやされます。わたしも権威の下にある者ですが、わたしの下には兵隊がおり、一人に『行け』と言えば行きますし、他の一人に『来い』と言えば来ます。また、部下に『これをしろ』と言えば、そのとおりにします』　イエスはこれを聞いて感心し、従っていた人々に言われた。『はっきり言っておく。イスラエルの中でさえ、わたしはこれほどの信仰を見たことがない。言っておくが、いつか、東や西から大勢の人が来て、天の国でアブラハム、イサク、ヤコブと共に宴会の席に着く。だが、御国の子らは、外の暗闇に追い出される。そこで泣きわめいて歯ぎしりするだろう』　そして、百人隊長に言われた。『帰りなさい。あなたが信じたとおりになるように』　ちょうどそのとき、僕の病気はいやされた」

ガリラヤ湖の岸辺の町、カファルナウムにイエス様がお着きになりますと、ローマ帝国の守備隊の指揮官であります百人隊長が、イエス様をたずねてまいりました。聞けば、部下の一人が脳卒中で倒れてしまって、半身不随で起き上がることもできないでいる。助けてほしい、ということです。さっそく行って癒してあげよう、とイエス様がおっしゃいますと、百人隊長は、とんでもございません、おいでくださるにおよびません、と申します。神に選ばれた民であるユダヤの方々からしてみれば、自分は罪に汚れた異邦人だ。そんな自分の家に、ユダヤの聖者でらっしゃるイエス様をお入れするなど、とてもとても恐れ多くて出来ません、と言うのです。じゃあどうしたらいいのか。百人隊長が申しますには、ひとこと、お言葉をくだされば、それで十分です、と言うのです。どうしてというに、自分は軍人として権威のもとに服する立場であって、この権威のもとにあって、兵隊に「行け」と、ひとこと言えば、行くし、「来い」と言えば、すぐに来る。「これをしろ」と言えば、ちゃんとそのとおりにする。それが権威のもとに服して生きている軍人の在り方だ。ましてやイエス様は神から来るところの権威を持ってらっしゃるお方である。神の権威を持つイエス様が、ひとことおっしゃれば、すぐまったくそのとおりになるのは、当然のことではありませんか。ですからイエス様、あなたからひとこと、お言葉をいただければ、それで十分です、というわけです。イエス様は、この百人隊長の信仰に大

変関心なさいまして、いや、これは驚いた。ユダヤ人の中だって、これだけの信仰は見られるものではない。いつか世の終わりになって天国で大宴会が開かれるとき、そこに集うのは、こういう百人隊長のような信仰を持つ大勢の異邦人であろう。これに反して、神に選ばれた民であるはずのユダヤ人は、大宴会から締め出されてしまうかもしれない。異邦人ほどの信仰がないからだ。そういうふうにイエス様はおっしゃったのでした。

今日の聖書において示されておりますのは、権威についてであります。イエス様が持っておられる権威。イエス様の権威が、どういう性質のものであるか、ということが示されております。

いったい権威というものは、本質から出てくるところの力でありまして、それがローマ帝国の軍隊の権威であります場合には、その力の本質はローマ皇帝にある、ということになります。ローマ皇帝の権威のもとにあって、その権威に服して、兵隊は命ぜられるままに力を用いることになります。

これに対してイエス様が持っておられる権威というのは、その力の本質は父なる神様にある、ということになります。父なる神様というのは、これは創世記で示されておりますとおり、全知全能の力を持った創造主なる神様でありまして、その力たるや、ただひとこと「光あれ」とおっしゃれば、光がある。「太陽と月が輝け」とおっしゃれば、そのとおり太陽と月が天に輝く。「陸ができよ」とおっしゃれば、海がさっと退いて陸地ができる、というふうに、そのお心のままに何でもできる無限の力であります。

この神を本質とするところの力。これが、イエス様が持っておられる権威でありまして、それがそのとおり、何でもすることができるということが、マタイによる福音書のこのあとの続きのところで明瞭に述べられております。

すなわち、熱を出して寝込んでいたペトロのしゅうとめから、たちどころに熱を去らせる力。悪霊に取りつかれた大勢の者たちから、お言葉だけで次々と全部悪霊を追い出してしまう力。舟をひっくりかえしてしまうほどの激しい嵐を叱りつけて、たちどころに「べた凪」にしてしまう力。墓場で暴れていた狂人たちから、一軍団ほどもの沢山の悪霊を、「行け」というたったひとことだけで、残らず追い出してしまう力。中風の人をいやし、十二年間も出血を患っていた女の血を止め、死んだ少女を生き返らせ、目の見えない人を見えるようにし、口のきけない人がしゃべれるようにする、そういう力であります。

さて、百人隊長は異邦人ではありましたが、自分自身が軍人として権威のもとに服する生活しておりましたゆえに、この無限の力、この無限の権威を持ったイエス様をすぐに「主」だと、「まことのあるじ」だと認めて、自分はこのイエス様、「まことのあるじ」にまったく服従しなければならない、ということを、ユダヤ人より先に悟ったのでありました。このイエス様の権威を認めて、イエス様の権威のもとに服して生きようと願った百人隊長の信仰を、イエス様はことのほか、お褒めになったのです。

ひるがえって、わたしたちの信仰は、どうでありましょうか。わたしたちは、イエス様を「まことのあるじ」「まことの主」として、認めておるでありましょうか。イエス様がお言葉をくださったら、自分は何としてもそれにお従いして生きて行こう。そういうふうに心を決めておるでありましょうか。イエス様が「行け」と言えば行き、「来い」と言えば来る。イエス様が「あれをせよ」と言えば、そのとおりにし、「これをせよ」と言えば、そのようにする。そういうふうにまったく心を尽くして、イエス様にお従いしているでありましょうか。ここが今日わたしたちに問われているところでありまして、わたしたちは、主イエスの権威に服しているだろうか、ということであります。

第二番目に考えたいことは、イエス様は、イエス様の無限の力、無限の権威を、わたしたちにお委ねくださる、ということであります。まったくおそれおおいことでありますけれども、わたしたちは、イエス様に従って行こうとするならば、イエス様が、イエス様の権威にわたしたちを与らせてくださる、ということであります。

すなわち、マタイによる福音書の続きの第 10 章に、このように示されております。「イエスは十二人の弟子を呼び寄せ、汚れた霊に対する権能をお授けになった。汚れた霊を追い出し、あらゆる病気や患いをいやすためであった」(マタイ 10:1)

イエス様は十二人の弟子たちをお選びになって、そのひとりひとりにイエス様の権威をお委ねになりました。イエス様の権威を委ねられた弟子たちというのは、ペトロ、アンデレ、大ヤコブ、ヨハネ、フィリポ、バルトロマイ、トマス、マタイ、小ヤコブ、タダイ、熱心党のシモン、イスカリオテのユダであります。イエス様の権威を委ねられた弟子たちは、出て行って、自分が預かったところの力を用いて、病人をいやし、死人を生き返らせ、重い皮膚病の人を癒し、悪

霊を追い出し、神の国の到来を力と言葉でもって告げ知らせました。

これほど大きな力を預けられた弟子たちというのは、どれほど見上げた立派な信仰の持ち主だろうかと思いますが、しかし、わたしたちの期待に反して弟子たちの信仰というのは、遅々として進まぬものであり、ついには、信仰を捨ててしまうほど弱いものであった、ということを、わたしたちはよく知っております。

すなわち、弟子たちはまず、イエス様の十字架ということが、まるで理解できなかった。これから十字架にかかろうということをイエス様が予告されたとき、弟子たちは「そんなことがあってはいけません」とイエス様をおいさめする始末でありました。さらに、実際イエス様が十字架にかかる段になりますと、あのイスカリオテのユダが裏切ったのはもちろんでありますが、ペトロをはじめとするすべての弟子がイエス様を見捨てて逃げ去ってしまいました。十字架のかたわらに最後までとどまっていたのは、弟子の中でもまだ若干十代だったヨハネただ一人だけでありまして、最年長のペトロに至っては、「イエス様なんか知らない」と三度も大見えを切って嘘をつくていたらくでした。さらにその上、イエス様が復活なすって、ガリラヤにてふたたび姿をお見せになったとき、弟子の半分は大喜びしましたが、半分は疑いの目でイエス様を見たというのです。復活のイエス様を目の前に見ていながら、なお信じることができなかった、という驚くべき不信仰のありさまです。

これほど弟子が不信仰だということを、イエス様はわかっておられなかったのでしょうか。もちろんイエス様は、全部お見通しの上で、そういう弱い、信仰の薄い弟子たちを、あえてお選びになったのです。それは、弟子の強さがほめたたえられるのではなく、弟子の弱さのゆえに、イエス様の恵み深さが、ほめたたえられるためであります。

こういう不信仰の弟子たちを、あえてイエス様はお選びになって、ご自分が恵み深い救い主であることを示すために、こういう不信仰の弟子たちに、イエス様の権威をお預けになった。これはほんとうに驚くべきことであります。

ですから、このわたしたちにも、イエス様はお声をかけてくださり、このわたしたちをも、イエス様は選んでくださり、このわたしたちにも、イエス様は、イエス様の権威をお委ねくださるのです。そうすると、このわたしたちも、イエス様の権威に与る者とせられることができるのです。それは、まったくわた

したちが何か偉いとか、それにふさわしいとか、そういう資格があるとかいうことではありません。まったくお恵みによることであります。パウロがこう申しておるとおりです。「わたしたちは、このような宝を土の器に納めています。この並外れて偉大な力が神のものであって、わたしたちから出たものでないことが明らかになるために」（コリント二 4:7）

これが今日わたしたちに告げられていることでありまして、信仰の薄いわたしたちを、なおもイエス様は信頼なすって、イエス様の権威をわたしたちにお委ねくださっている、ということであります。わたしたちは、そういう並外れて大きな力を頂いているということについて、何か自分が偉くなったように、何か自分が強くなったように、何か自分がひとかどの者になったように錯覚してはいけない。イエス様は、わたしたちが信仰の薄い者であることをお見通しの上で、あえてそうなさっているというわけですから、わたしたちは、これをおそれて、ひたすらへりくだって、イエス様にお従いしなければなりません。

第三番目に考えたいことは、力を手放す、ということであります。それがすなわち、十字架の道ということであります。

これほど並外れて大きな力、大きな権威を持っておられたイエス様ですが、しかしイエス様は、この大きな権威を、これっぽっちもご自分のためにはお使いにならなかった。それは、あの荒れ野の誘惑において、イエス様が見事にお示しになったとおりであります。

荒れ野でイエス様が四十日四十夜断食なすったとき、悪魔が誘惑するためにやってまいりました。悪魔は、イエス様が神の権威を持ったお方である、ということを重々承知しておりましたから、こういうふうに誘惑いたしました。

イエス様、おなかがすいているんだったら、あなたのその大きな力、大きな権威で、石をパンに変えて食べたらいいじゃないですか。イエス様、たくさんの人を集めたいんだったら、あなたのその大きな力、大きな権威で、空中に浮かぶようなショーをやって、宣伝すればいいじゃないですか。イエス様、世界中の人をあなたのもとへなびかせたいんだったら、あなたのその大きな力、大きな権威で、世界中の人を意のままに支配すればいいじゃないですか。そういう悪魔の誘惑であります。

これに対してイエス様が、ぴしゃっとおっしゃったことは、わたしは自分の好

きなように力を使うのではなくって、ただ父なる神さまの「お心」に従って力を使うのだ、ということでありました。

ここがまた今日わたしたちに大きく問われているところでありまして、いったいわたしたちも、イエス様から、イエス様の権威、イエス様の力を預けていただいている、イエス様の権威に与っているお互いであるのだけれども、じゃあ、わたしたちは、その預かっている力を、どういうふうに使っているんだろうか。せっかく頂いているこの力、この権威というものは、わたしたちはただ、自分の思いとおり、好きなとおりに使って、満足しているだけなのだろうか。それとも、この力、この権威というものを、ただ父なる神さまの「お心」に従って使っているのだろうか。ここが今日わたしたちに問われていることであります。

そうして、十字架の道であります。十字架の道を進んで行かれたイエス様がお示しになったのは、最終的には、神の力、神の権威を、まったく手放しなすった、という厳粛なる事実であります。どうしてまたイエス様は、ご自分のその並外れた力、並外れた権威を、手放すようなことをなすったんだろうか。

マタイによる福音書第 26 章 50 節から 54 節をお読みいたします。ゲッセマネの園でのイエス様の逮捕の場面であります。「人々は進み寄り、イエスに手をかけて捕えた。そのとき、イエスと一緒にいた者の一人が、手を伸ばして剣を抜き、大祭司の手下に打ちかかって、片方の耳を切り落とした。そこで、イエスは言われた。『剣をさやに納めなさい。剣を取る者は皆、剣で滅びる。わたしが父にお願いできないとでも思うのか。お願いすれば、父は十二軍団以上の天使を今すぐ送ってくださるであろう。しかしそれでは、必ずこうなると書かれている聖書の言葉がどうして実現されよう』」

ここで問われておりますことは、自分が何を願うのか、ということよりも、父なる神の「お心」はどうなのか、ということであります。イエス様は、イエス様の権威を用いて、この苦境を脱出することができた。その並外れた権威を用いれば、父なる神は十二軍団もの天の軍勢を送って、イエス様を救出し、十字架にかからないようにすることができた。

しかし、あえてそうなさらなかった。なぜならイエス様は、十字架にかかることこそが、自分に対する父なる神の「お心」であるということを、深く知っておられたからです。

いったいどっちであるのだろうか。神の力を用いることが善であるのか。父なる神の「お心」に従うことが善であるのか。力を用いることが善なのか。力を下さった方に従うことが善なのか。神の力が善なのか。神ご自身が善なのか。

「お心」に服すること。「お心」に従うこと。それこそが、イエス様のなさるべきことでありました。力は無条件に善ではあり得ません。力は、それが神のお心に従って用いられる限りにおいてのみ善であります。イエス様は、力を捨てることが父なる神のお心である、と知ったとき、父の心に従って、力を手放し、権威を手放し、十字架にかかられたのです。力を捨て、権威を捨てて、十字架にかかる道をお選びになったのです。

ひるがえって、わたしたちはどうでありましょうか。神様は、わたしたちに沢山の良いものをお委ね下さっております。力も権威も、神様がわたしたちにお委ねくださっている沢山の良いもののひとつであります。だが、わたしたちは、ほんとうのところ、どうなのだろう。力を愛し、権威を愛しているのだろうか。それとも、神を愛し、神に従いたいと思っているのだろうか。

神様がわたしたちにこのようにおっしゃる瞬間がございます。「力を手放して、わたしに従いなさい」　このときに、わたしたちは、本心を問われているのであります。わたしたちの愛が、問われているのであります。ほんとうのところ、わたしたちは、力を愛し、権威を愛しているのか。神を愛し、神に従おうとしているのか。

「力を手放して、わたしに従いなさい」　これが十字架の道を行く、ということでありまして、わたしたちは自分の人生の中で、十字架の道を選び取るよう迫られる瞬間が時々ございます。ブルームハルトは、このように申しました。「必要なのは、ただ一つ。君は誰を求めているのだ。君自身か、それとも神か。君自身の事か、神の事か」

イエス様はおっしゃいました。マタイによる福音書 8 章 19 節と 20 節をお読みいたします。「ある律法学者が近づいて、『先生、あなたがおいでになる所なら、どこへでも従って参ります』と言った。イエスは言われた。『狐には穴があり、空の鳥には巣がある。だが、人の子には枕する所もない』」

わたしたちは、誰を求めているのでしょうか。自分自身の願望の実現でしょうか。それとも父なる神の「お心」でしょうか。わたしたちに委ねられている力、

委ねられている権威を使って、自分の願望を実現することでしょうか。それとも、力を捨て、権威を手放してまでも、父なる神の「お心」に従っていこうとすることでありましょうか。今日問われておりますのは、弟子としてのわたしたちの覚悟であります。

お祈りいたしましょう。

祈り

天の父なる神様。どうかわたしたちが、あなたの下さる力を求めるのでなくして、あなたご自身を求めることができますように。あなたの下さる権威を求めるのではなくて、あなたご自身を求めることができますように。どうかわたしたちが、自分の願望の実現を求めるのでなくして、父なる神の「お心」を求めることができますように。どうかわたしたちが、自分の喜び、自分の満足を求めるのでなくして、神の喜び、神の満足を求めることができますように。わたしたちは、あなたから沢山の良いものを頂いておりますが、力や権威を含めた、それらの良いものが、いつのまにかわたしたちの心を捕えて偶像となり、わたしたちを支配する神々となることがありませんように。どうかわたしたちが、ただひたすら、心を尽くし、思いを尽くし、力を尽くし、知恵を尽くして、神を愛し、神にお従いして行く、その道だけを選ぶことができますように。どうかわたしたちの信仰をお導きください。
主イエスキリストの御名によってお祈りいたします。アーメン